

《書評》

『K-POP 現代史：韓国大衆音楽の誕生から BTS まで』

山本浄邦*、ちくま新書、2022 年

黄 盛 彬†

卒業論文で「K-POP」について書きたいという学生が増えている。近年の K-POP の人気は、ブームという言葉が相応しくないほど日常化しており、新たな日常の風景になっている。ナイキやアディダスなどのスポーツブランドのショップでは、K-POP アイドルの歌が流れていて、ロフト（LOFT）のコスメコーナーで、K-POP のアイドルの写真が飾られていることも珍しい風景ではもはやない。しかし、その一方で、未だ地上波テレビや新聞などの主流メディアの世界では、こうした現象を「ブーム」として取り上げていて、真剣に、あるいは普通に語ることに躊躇があるようにもみえる。K-POP の流行現象を真剣に、そして普通に語らない感覚は、言い換えれば、主流文化として受け入れられることへの躊躇でもあろう。このような躊躇^{ためら}いは、テレビなどの主流メディアだけではなく、学問や評論の世界も同様にみられる。例えば、有名な音楽評論家が K-POP について、いわゆる洋楽や J-POP と同じ水準で評論する場面はあまりみないように思える。大学の図書館の書架を調べてみても、同じような事情が窺える。もちろん、このような事情には、K-POP の浮上があまりにも想定外の出来事であったことが背景にあり、既存の学問や評論の世界では、この現象を真剣に、そして普通に考える準備ができておらず、ただ驚いているのかもしれない。だからであろう。音楽学者やポピュラー音楽を専門とする研究者でない現代史研究者が「日韓」を媒介として、この分野の新書の書き手として浮上するようになっていたのではないだろうか。

著者の山本浄邦氏は、大学生だった 1995 年に韓国を旅行し K-POP に出会い、以降、K-POP を追いついており、本書を刊行するまでに至っているが、本来の研究テーマは、日本と朝鮮半島を中心とした近現代東アジアの文化や宗教をめぐる交流の歴史である。佛教大学大学院文学研究科では東洋史学を専攻しており、博士後期課程を修了後に、韓国学中央研究院の招聘研究員として 2014 年に渡韓し、同研究院での 2 年間の研究生活の後、高麗大学校亜細亜問題研究所の招聘研究員、外務省専門調査員（在釜山日本国総領事館勤務）などを経て、2019 年に帰国し、現在は、立命館大学をはじめ佛教大学・龍谷大学・帝塚山学院大学・大阪産業大学で韓国ポップカルチャー（主に K-POP）・朝鮮語・朝鮮史・仏教史などに関する講義を担当している。なるほど、このように著者の経歴を辿ると、この本のタイトルが「K-POP 現代史」である訳がわかる気がする。

* 立命館大学文学部授業担当講師

† 立教大学社会学部教授
seongbin@rikkyo.ac.jp

本書の重要な意義は、日本社会における K-POP に関する主流の語り方、いわば常識的な理解に一石を投じることにある。まず「K-POP 快進撃の理由」について、「韓国は国内市場が狭いから」、「国家が後押ししているから」という説明は、飽きるほど多いのが現状であるが、山本氏は「短絡的な説明が各種メディアで散見される」と一喝し、「果たしてそのような単純な理由だけで、現在の K-POP 快進撃が可能になったのであろうか」と疑問を投げかける。そして、「国内市場の狭さでいえば、人口 5000 万人を超える韓国より音楽市場の小さい国の方が世界にはずっと多く、また、国家の後押しだけで世界的な成功を取めることができるほど、文化コンテンツビジネスの世界は甘くな」く、もしそうだとすると、文化芸術への国家的支援が厚く自国の映画産業の保護に熱心なフランスの映画や、「中国夢」というキャッチフレーズのもと、中国版のソフトパワーで文化による国威の発揚を謳っている中国の C-POP が「世界の市場を圧倒しているはずだ」と反論する。その上で、K-POP の快進撃の理由を明らかにするためには、K-POP を K-POP たらしめた背景がどのように形成・発展してきたのか、という歴史的アイデンティティに迫る必要があり、そのためには、韓国の音楽業界がおかれている状況を説明するだけでは不十分であり、K-POP が形成・発展・越境するプロセスの解明こそが不可欠と力説する。

さて、ここからは本の紹介に入ろう。

本書の問いは、K-POP は韓国でどのようにして生まれ、いかにして今日のように日本や世界に広まっていたのか。そして、また、K-POP の越境とグローバル規模の拡散は世界にどのような変化をもたらしたのか、である。このような問いのもと、韓国内外の情勢と K-POP の形成・発展との関係を通史的に論じている。

本書は、5つの章で構成されている。第1章と第2章はこの本のタイトルの「現代史」に相応しており、第1章では、「K-POP 前史——韓国大衆音楽の誕生と発展」、第2章では「戦後日韓関係と「韓国ブーム」——「韓国といえば演歌」の時代」を論じている。そして、第3章から第5章は、本格的な「K-POP の時代」の分析として、第3章では、1990年代から2000年前半頃までの時代を射程に「K-POP の誕生と越境」を論じる。民主化、ネット社会、韓流をキーワードとして、ここでは、民主化以降の韓国社会においてヒップホップ文化とアイドル文化が結合して K-POP が誕生していく過程をみるとともに、韓国における高速インターネットの急速な整備と、それと並行して進んだオンラインコミュニティの持つ意味、さらに中国との国交正常化（1991年）後の関係拡大の中での「韓流ブーム」（実は、韓流という言葉が初めて使われたのは、中国である）の始まり、1998年の「日韓共同宣言」、そして2002年の日韓共催のサッカー W 杯で進む日韓交流の拡大で起きた日本における韓流ブームに触れる。続く第4章では、「ソーシャルメディア時代の K-POP ブーム」というタイトルで、少女時代らの進出による日本での K-POP ブーム到来と、その後の日韓関係の悪化による影響やファンたちの対応、そして TWICE の日本進出などを契機にブームが再来し、コロナ禍でも継続している状況とその背景を分析する。ここでは、少女時代・KARA・TWICE・NiziU など主に女性アイドルグループが取り上げられる。第5章では、「世界化する K-POP」というタイトルで、BTS が主に取り上げられる。K-POP が越境した理由を、メッセージ性と異種混雑性 (hybridity) という観点から考え、この K-POP の広がりが 21 世紀を生きる人々にどのような影響を及ぼすかについて論じる。

冒頭でも書いたように、本書における重要な問題提起は、「音楽市場が狭いから」、「政府が支援し

ているから」といった K-POP 成功の秘訣を語る主流メディアによる、あまりにも短絡的で非専門的な分析がむしろ定説となっているような日本社会の風潮に一石を投じる試みとしても評価できる。日本におけるポピュラー音楽がそうであったように、近現代史の中での様々な文化交通がもたらした異種混淆性こそが、K-POP の音楽としての形成に重要なものであり、また韓国社会が経験した圧縮近代化の中のさまざまな物語も、K-POP の理解には欠かせないという点に気づかせてくれている点も評価できよう。また、著者が BTS の音楽におけるメッセージ性に注目するように、「現代を生きる若者たち、さらには世代を超えて共有しうるような人間の挫折や不安、寂しさといった感情に共感し、それを包み込む力」が求められている今の世界のあり様、そしてグローバル規模で広がるトランスナショナルなファンダムの形成のメカニズムの解明こそが、求められている課題であることを力強くアピールしていることも、本書の評価ポイントである。

本書は、K-POP 現代史という野心的な企画でありながら、新書というメディアでの発表であるため、本格的な歴史分析や社会学的な実証的な分析は後続の研究に期待したいが、そのための課題について言及したい。無い物ねだりかもしれないが、まず、本を読み終わって思うことは、K-POP という現象については、韓国の現代史との共鳴または連結だけではなく、乖離または断絶にも注目する必要があるかもしれない、ということである。この問題は、日本における「韓国の大衆音楽」の受容というテーマとして考えるならば、なお重要であろう。例えば、本書では、1980 年代をピークとした韓国人が歌う演歌ブームを取り上げながら、「音楽のジャンルやファン層において現在の K-POP とは大きく異なるが、日本における K-POP 受容の先駆けとしての意味は小さくない」として、その理由について、「日本の消費者にとっても音楽業界にとっても、韓国人歌手に対する親近感や信用を生み、21 世紀の韓流ブーム、そして K-POP 受容のための歴史的基礎になったことは確かであろう」と説くが、果たしてそうだろうか。この解釈は、やや無難な、奇をてらわないまとめにも思える。

1980 年代までの、いわば韓国演歌の流行と、2000 年代以降の K-POP の人気の間には、むしろ断絶があったことについて注目する必要はないだろうか。その最たる例は、この本でも紹介されているチョー・ヨンピルの歌の日本における受容または流行である。1980 年代に韓国の演歌歌手として人気を集めたチョー・ヨンピルは、1990 年代の日本ではほぼ忘れられていた。しかし、チョーはその後にも旺盛な音楽活動を続けていて、1990 年代半ばには第 2 の全盛期を迎えており、成功の頂点にいらながらも、新たな実験と創造に挑戦していく姿には多くの尊敬も集まるようになっていた。昨年 (2023 年) の 12 月から Netflix で配信がスタートした韓国ドラマ「サムダルリへようこそ」では、チョー・ヨンピルの歌が OST (オリジナル・サウンド・トラック) として全編に流れているが、まさにチョー・ヨンピルの歌への賛辞 (tribute) でもある。日本でも、配信早々トップ 10 を賑わし、人気を得ているというが、そのドラマで流れているチョー・ヨンピルの曲は、多くが 1990 年代に発表されたものであり、当時の日本では知られていない曲ばかりなのである。当時の日本社会は、韓国人歌手チョー・ヨンピルに最先端の音楽ではなく、むしろ懐かしい演歌のメロディーと切ない声のみを聞きたがっていたのではないだろうか。その意味では、韓国における現代の K-POP の形、すなわちヒップホップとダンス音楽の結合のパイオニアである「ソテジーとアイドル (Seo Taeji and Boys)」の音楽が、1990 年代の日本では、大きな注目を集めることなく、見過ごされていたことも、同じ脈絡で理解することができよう。

1990 年代から 2000 年代に至る時期は、激変の時期でもあり、停滞の時期でもあった。韓国の政治が民主化以降、進歩と保守の政権交代が冷温を行き来する過激な変化を繰り返してきたのに対し、日本の政治は 55 年体制の解体と民主党政権の発足で短い政権交代があったものの、長期的には自民党と公明党の連立政権が固定化され、政治イデオロギー的には保守回帰の路線が長期化した。経済的にはどうだろうか。その間、韓国の経済は国民所得 1 万ドルから 3 万ドル台に「成長」したが、日本の経済は失われた 10 年、20 年が過ぎていく間、「美しい日本」とか「とてつもない日本」というような自己満足的な言説が蔓延する社会になった。そうして文化の領域では、いまシティポップスとして再び注目を集めるようになっていく 80 年代のテクノポップスや 90 年代の輝くサウンドの J-POP は衰退し、AKB48 に代表される「未熟な」アイドル文化が空席を埋めるようになる一方で、国内市場は十分に大きいという自己満足的な言説が再び蔓延するようになったのであろう。2000 年代以降の K-POP の受容には、このようなコンテクストがあることも、本書における通史的な概説を読むことで、改めて認識させられる。

このように日本社会における K-POP の受容を通史的に辿ってみると、1980 年代までは、いわばポスト・コロニアルなつながり、または新帝国主義の背景が存在していたとすれば、2000 年代以降の時代は、グローバル化の背景が存在していたとも言えるのではないだろうか。そして、1990 年代は、まさに過渡期的な時期であり、日本から韓国またはアジアへの眼差しとして、ポストコロニアルまたは新帝国主義的なものがもはやリアリティを失い、日本社会ではナショナルな立て直しがむしろ主眼となり、内向きになってしまった現状が改めて浮かび上がってくるようにも思われる。本書における「K-POP 現代史」の概説は、近現代東アジアの文化の交流の歴史の解明作業の一環として大変意義深いものであり、広く読まれることを期待したい。もちろん、卒業論文で K-POP を取り上げたい学生には必須文献として推薦したい。